

令和4年度
丹波の森研究所活動報告

報告書

令和5年3月

目 次

はじめに

1 令和4年度調査研究・活動報告

- 1-1 地域課題解決に向けた調査研究……………2
 - (1) 集落再生に資する拠点のあり方研究
 - (2) 丹波の森づくりにおける情報ネットワークの構造化業務
 - (3) 丹波の森づくり推進連絡調整会議
- 1-2 フォーラム「持続可能なコミュニティ」の形成に向けて……………15
- 1-3 地域づくり支援事業……………17
 - (1) 地域づくりアドバイザー派遣

2 令和4年度委託業務

- 2-1 縄文の森ユース躍動プロジェクト……………18
- 2-2 丹波地域のモデルとなる里山づくり活動団体支援業務……………27

【資料編】

- 資料1：丹波地域における移住および二地域居住等現状分析報告書
- 資料2：丹波の森づくりにおける情報ネットワークの構造化業務報告書
- 資料3：丹波の森研究所地域づくりアドバイザー派遣報告書
- 資料4：縄文の森ユース躍動プロジェクト報告書
- 資料5：丹波地域のモデルとなる里山づくり活動団体支援業務報告書

はじめに

丹波の森研究所は、「丹波の森構想」（人・自然・文化・産業の調和した丹波地域づくり）を推進するシンクタンクや支援組織をめざして、平成8年（1996年）、財団法人丹波の森協会（現、公益財団法人兵庫丹波の森協会）によって設けられました。初代の中瀬勲所長を中心に、地域づくりに関する諸分野に関する調査研究を行ってきましたが、平成28年度をもって退任され、平成29年度は、関西学院大学の角野幸博先生を新所長に迎え、新たなスタートとなりました。

平成30（2018）年度は「丹波の森構想」30周年であり、また県政150周年となる節目の年度でした。11月には「丹波の森宣言30周年記念シンポジウム」が開催され、「これからの丹波の森づくり」の骨子が提案されました。丹波の森研究所では、新たな課題として提案されたうちの「集落に住み続けるための集落再生・活性化」と「生物多様性の保全に向けた取り組み」を研究テーマとして調査研究を進めています。

今後丹波の森研究所としては、こうした社会的課題の解決に役立てていくよう求められており、丹波の森研究所としても新たな展開を図るべきところにあります。

丹波の森研究所の主たる業務は、地域づくりにおける相談、アドバイス、情報提供、学習会などを通じた地域づくりの支援のほか、丹波の森づくりに関する調査研究、講演や報告会などを通じた啓発・普及、行政の施策・事業に関するアドバイザー協力を行うほか、「丹波地域恐竜化石フィールドミュージアム推進協議会」の調査企画部分を担っています。

■丹波の森研究所 所員 （令和5年3月現在）

研究所所長	角野 幸博（丹波の森公苑長兼務）
研究所次長	倉 剛史（丹波の森協会事務局長）
主任研究員	門上 保雄
特任研究員	上甫木 昭春
登録研究員	上岡 典子
	横山 宜致
	片平 深雪
	小橋 昭彦
	出町 慎
	谷垣 友里
	垣内 敬造
	内田 圭介
	門上 幸子
宮川 五十雄	

1 令和4年度調査研究・活動報告

1-1 地域課題解決に向けた調査研究

(1) 集落再生に資する拠点のあり方研究

1) 調査研究の背景

近年、人口減少や高齢化などにより、小規模集落化が顕在化している。丹波地域においても地域の約7%が小規模集落（世帯数50戸以下で高齢化率（65歳以上）が40%以上の集落、市街地およびその周辺、駅周辺などを除く）となっており、早急な対策が求められている。

昨年度までに実施した調査研究から、拠点の階層構造とネットワークについては、従来から把握されている地縁型（自治会、まち協）、地域間型（都市農村交流など）、広域型（SNSなど）に加えて、多様なプレイヤーが中心となって様々なネットワークが形成されていることが知られている。

近年、こうしたプレイヤーの活動が集落再生にも寄与していることがアンケート調査などからも伺え、その点を踏まえ、今年度調査を行うものとした。

2) 調査研究の概要

① ヒアリングのまとめ

- ・丹波篠山市および丹波市域で多様な活動を展開しているプレイヤーを抽出し、ヒアリングを実施した。
- ・ヒアリングでは、ヒアリング対象者が地域内外で、どのようなネットワークを構築し、活動を展開しているのかを図示した。

ヒアリング まとめ事例

働く

NPO法人情報社会生活研究所
NPO法人 iso
丹波市

- ITを地域のために活用したい、ブロードバンドの実現を目指す
2001年に地元・春日町へヒアリング
東京で、メールマガジンの発行などを行い、7万人もの読者会員との繋がりを築いていた。同時にITベンチャーのデータセッションの立ち上げを行った。ITを地域のために活用したい、ブロードバンドの実現を目指して2001年に地元・春日町へヒアリング
春日町研究会や地元の仲間と一緒にシフトアップが実現した。「isoワークデイ」や「iso舎」などを企画運営してきた。
- 田舎の価値を日本全国に発信したい
2005年 NPO法人情報社会生活研究所設立
2005年シフトアップがきっかけでNPO法人情報社会生活研究所設立。2005年入居の丹波暮らしフォーラムを共同企画し、運営に携わった。丹波市の移住定住に関する事業や外部関係「あるまじき移住定住促進委員会」の創設メンバーとなり、「起業家養成講座」など企画。
2010年ごろから、丹波地域内での市民活動の活性化を受けて、横のつながりネットワークを担い「iso」を企画。
2011年の東北大震災を機に、移住者が増え始めたことをきっかけに移住者の視点で地域デザインに取り組む会社「iso」を設立
2014年に市民活動の中間支援を行う組織としてNPO法人 iso を設立
- 2020年 オンラインサロンで田舎と都市部を繋ぐ iso 乃家にコワーキングスペースなど整備
2018年から丹波市民協会の「移住推進プロジェクト」にNPO法人 iso として関わりの始。都市部と丹波地域の繋がりを取り組んでいる iso 乃家をオンラインサロンとして田舎と都市部を繋ぐ拠点とするべく、コワーキングスペースや駅前機能、セミナーベースなどを整備した。 最近オンラインサロンの会員は30名で、コロナの状況を見極めつつ、都市部会員の増加を目指し事業展開中

●2 地域居住相関図

二地域居住相関図からコワーキングスペース・レンタルスペースとして整備した「iso 乃家」を拠点としてネットワークを構築。丹波地域の「働く」ための拠点としてだけでなく、オンラインサロンや移住推進事業の広域ネットワークの拠点としても活用されている。

大崎 こともの草、安き草 吹野成市、大崎未来会議、小橋定彦さん、iso 乃家、NPO法人 情報社会生活研究所、NPO法人 iso、丹波暮らしフォーラム、丹波暮らしフォーラム交流センター、丹波暮らしフォーラムカフェ、丹波暮らしフォーラムセミナー、丹波暮らしフォーラムetc.

●活動の要素をレイヤー分けて整理

コト・活動	移住・交流事業	オンラインサロンの運営
資金・制度	兵庫県戦略的移住推進事業	自己資金 (共有物件を改修)
拠点	iso 乃家 丹波地域のゲストハウス農業民宿等	iso 乃家
ネットワーク	ソシエテ・リビド NPO法人 iso 等	オンラインサロン メールマガジンの読者会員等
地域	丹波市・丹波篠山市	丹波市、日本各所 (広域ネットワーク)

②ヒアリングから見えたネットワークの形

本調査によって、丹波地域における移住・二地域居住は、以下のようなネットワークの形によって分類できることが明らかになった。

- ア) 地縁型ネットワーク 自治協議会やまちづくり協議会、単位自治会など神社と氏子、お寺と檀家など任意の地域団体など地域住民、地域に縁をもつ者が主となるネットワーク。下記に示すネットワークとの接点をいかに増やすかが重要。
- イ) 移住者間ネットワーク 移住してきた人同士の間で形成されるネットワーク。移住者交流会や先輩移住者の紹介といった取組や、イベント、メディア（移住促進を目的）等を通じて形成される。「移住」という明確なキーワードが、ネットワークを構築する際の共有事項となっている。
- ウ) 地域間ネットワーク 丹波地域と阪神間など丹波以外の地域コミュニティ間で形成されるネットワーク。田舎暮らし・都市農村交流をきっかけに増加。移住者が移住前の地域で持っていたネットワークと丹波地域でのネットワークが横断的に関わることで生じる。関係人口の増加と強く連動している。
- エ) 趣味趣向型ネットワーク コーヒーやカメラ、サイクリング、山登り、キャンプなど趣味趣向に合わせた様々な活動を介したネットワーク。
SNS等の普及により、趣味趣向を同じくする人が繋がりがやすく、活動の様子を拡散するのが容易になったことが背景にある。専門的でニッチな技術・ノウハウを持った人材の掘り起こしや育成、地域内で活躍できる素地になりうるネットワーク。
- オ) 師弟型ネットワーク 師匠(マスター)に弟子入りする、師弟関係ネットワーク。古くは大工などの職人世界で見られたネットワークの現代版。蕎麦屋やコーヒーショップなどで見られはじめ、ある専門的な技能を持つ人材のもとに弟子入りし、将来的に自立して地域で生きていくための技術・ノウハウを得ることを目的としている。弟子入りのカタチとして、週末移住や二地域居住、二地域仕事の形態をとるケースが多い。師匠が、弟子の移住相談

や住まいの相談役になるケースが多く、可視化されていないが移住定住に貢献していると考えられる。

- カ) 広域型ネットワーク インターネット、SNS、テレワークやリモートワーク等の普及による全国レベル・国際レベルのネットワーク。海外から丹波地域への移住者も増えてきており、アフターコロナを見据え、観光インバウンドとは異なる国際レベルの関係人口の構築を目指したい。また人口減少時代において、地域間で人材・ノウハウ・情報を「シェア」するためのネットワークとしても重要。

丹波地域の集落活性化に資する移住や二地域居住を実現するには、上記各タイプの特性を理解したうえで、丹波地域において、必要かつ効果的なネットワーク拠点を戦略的に構築することが重要である。

③ネットワーク拠点づくりの提案（今後の課題）

ア) 集落拠点

丹波地域で活動する自治協議会やまちづくり協議会、農家や事業者の拠点、宿泊施設やコワーキング施設など、各集落ですでに活動している集落単位の拠点を「集落拠点」として支援する。都市部拠点と丹波地域内の各集落拠点を繋ぐマッチング機能や移住・二地域居住の支援機能、ネットワークを接続するコネクター機能などを有した総合拠点の整備と併せて検討する。

イ) 総合拠点

集落拠点は各集落内の活動に重点が置かれるため、「マッチング機能」「拠点を繋ぐ機能」「情報を収集・発信する機能」などをもつ総合拠点の設置を検討する。総合拠点としては、「新たな拠点施設を整備する」、「道の駅やSA等の既存施設に総合拠点の機能付加をする」などの代替案が想定されるほか、「総合拠点となるコア施設と複数のサテライト施設を設ける」等拠点施設を核とするネットワークの検討も必要となる。

総合拠点の立上げには人材配置や場所など様々な検討が必要となることから、「総合拠点あり方検討チーム」を立上げ、地域内の実践者や地域内外の専門家、行政関係者らと具体的な検討を進めていく。

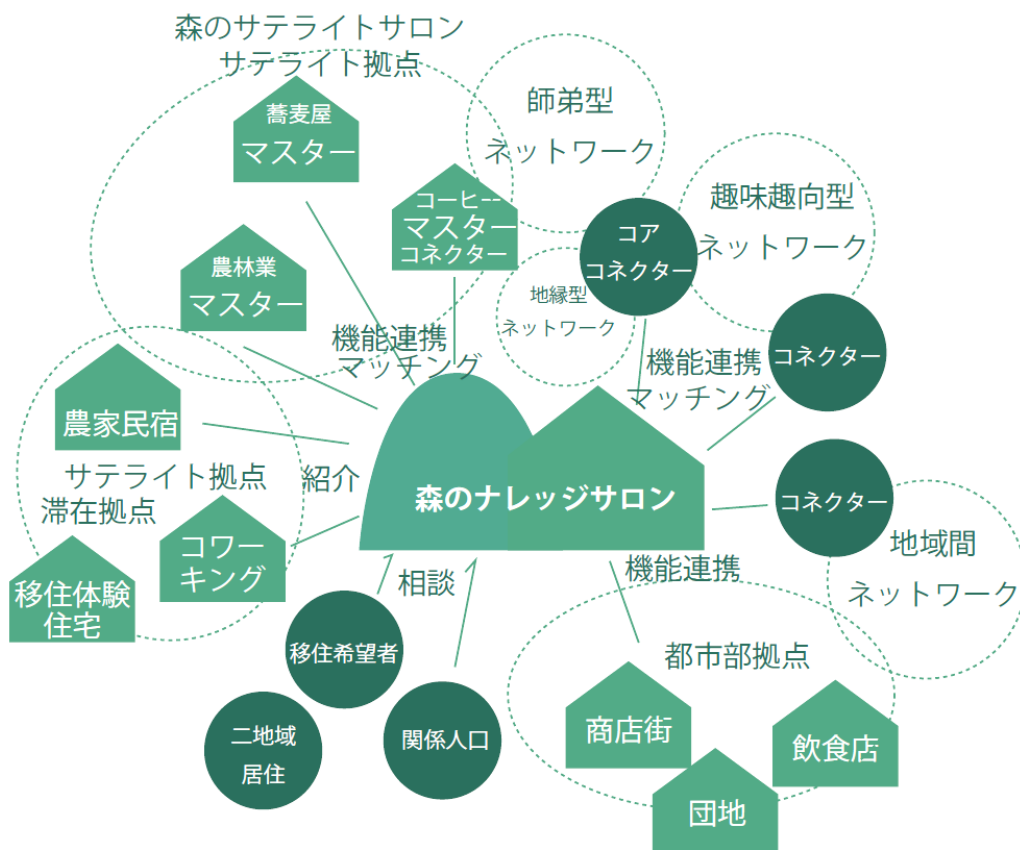
ウ) 丹波の森の多様な恵みをつなぐ拠点の開設

丹波の森が培ってきた文化・伝統・技術・知識を産業化する拠点として「森のナレッジサロン」を開設する。大阪市北区にあるナレッジサロンは、ビジネスパーソン、研究者、大学関係者や、クリエイターや芸術家など、さまざまな分野を

超えた出会いと交流により、そこから新たな価値創造をめざす場となっている。森のナレッジサロンとは、丹波の森構想を基本理念とし、様々な分野の人々の知的交流や新たな産業を創出する機会を得ることができる場とする。

森のナレッジサロンは、コネクターやマスターと連携することでマスターの育成、師弟マッチング、趣味趣向型ネットワークマッチングの機能を担うとともに、世代間ネットワークのノードとしての役割を果たし、現在丹波で活動している人や二地域居住・二地域仕事などで関わりを持つ人、さらには関西圏の経済界とも繋がる新たな起業家などに対して、「丹波の森の恵み」を活かせるようにノウハウやネットワークの提供ならびにビジネスサポートを行う。

森のナレッジサロンは、下図に示すように、様々なネットワークのハブ拠点、コネクターやマスターとのマッチング拠点、二地域居住や移住希望者など関係人口の拠点の役割を担う。また、コネクターやマスターが活動する各拠点を、「森のサテライトサロン」として機能連携する。上記の拠点において、多様な分野や世代間での交流が可能となり、丹波の森の恵みの産業化につながる知恵や技術を獲得することが可能となる。



森のナレッジサロンのイメージ

(資料 1 : 「丹波地域における移住および二地域居住等現状分析報告書 (令和 4 年 3 月)」)

(2) 丹波の森づくりにおける情報ネットワークの構造化業務

1) 調査の背景と概要

2020年度と2021年度の2カ年に渡り「丹波地域における移住及び二地域居住等現状分析調査」を実施した。

丹波地域における移住・二地域居住の実践者へのヒアリング等を通じて、人的ネットワークの視点を中心に、仕事や拠点のあり方にも着目してその現状・課題を把握した。さらに、丹波地域における移住及び二地域居住を考える上で、「ネットワーク」がキーワードとなっていること、ネットワークを作り出し、人と人を繋げる役割を担う「コネクター」、ネットワーク間を横断的に繋げる「コアコネクター」、師匠と弟子の新しい繋がりを作り出す「マスター」の存在が重要であるということ、ネットワークの形成にあたっては拠点の重要性が調査・分析の中で明らかとなってきた。

これまでの調査・分析を踏まえて、今年度は下記の項目について情報の収集およびリスト化を行い、丹波地域における移住及び二地域居住の展開に向けた提言、総合的な拠点「丹波の森ナレッジサロン(仮称)」の形成に向けた提言を行うことを目的とする。

○丹波地域内のネットワークリスト

「趣味趣向型」「師弟型」ネットワークを中心に、既存のネットワークの現状を把握し、リスト化する。将来的にネットワークバンクのベースとなることを想定している。

○丹波地域のネットワーク拠点リスト

上記ネットワークの拠点として機能している場所を「滞在拠点」「仕事拠点」「活動拠点」「店舗型拠点」「師弟型拠点」に分類して、抽出・リスト化を行う。

○丹波地域内で活動する「コネクター」「コアコネクター」「マスター」リスト

○「丹波の森の恵み」産業化事例リスト

「農業」や「林業」、「木工」、「伝統」、「食」など丹波地域ならではの資源(丹波の森の恵み)を活用した取組事例の収集を行う。将来的な丹波地域での起業・ビジネス支援に繋げる。

2) 調査研究の概要

①丹波地域内のネットワークリスト(27ネットワーク)

- ・趣味趣向型ネットワーク、師弟型ネットワークを中心に既存のネットワークの現状把握し、リスト化することで、ネットワークバンクの構築につなげる。
- ・一方で、自治会や寺院など地縁型ネットワークの把握と社会関係資本としての連携体制の構築に取り組む。二地域居住の負担増によって生じる諸問題や空き家や農地

等の資産の活用に関する相談情報が集まる拠点として地縁型ネットワークとの協力関係は重要である。丹波篠山市および丹波市域で多様な活動を展開しているプレイヤーを抽出し、ヒアリングを実施した。

【丹波地域内のネットワークリスト例】

No.	分類						エリア		ネットワーク概要					
	地縁型	移住者間	地域間	趣味趣向	師弟型	広域型	丹波市	丹波篠山市	名称	ネットワーク概要	活動事例	マスター	コネクター	拠点
1	○	○	○	○			○		NPO法人佐治倶楽部	空き家活用サークル	サジイチ		出町慎	関西大学 佐治スタ
2				○			○		丹波サイクリング協会	サイクリングネットワーク	ツールドたんば		松井崇好	
3			○	○			○		ダイナソーベース	キャンプ場建設と運営			伊藤勇矢	ダイナソーベース
4				○			○		bloomコーヒー秘密会議	コーヒー愛好会	コーヒーを楽しむイベント	マイク・清水健	マイク・清水健	衣川會館
5			○				○		iso乃家オンラインサロン	地域活性化などを学びあうオンラインサロン			小橋昭彦	iso乃家
6				○	○		○		遊びの学校	大路こどもの森	子どもと一緒に里山で遊び学ぶ場	山崎春人他		大路こどもの森
7			○	○			○		mocca	木を使ったクラフト等の会員制グループ		辻徳人 辻聖子	辻徳人 辻聖子	mocca
8			○	○	○		○		ミチノムコウBe	会員制の酒米から日本酒を作るプロジェクト	田植え～稲刈りイベント等	吉良佳晃	吉良佳晃	
9			○		○		○		NIPPONIA	NIPPONIAホテルの事業展開	NIPPONIAサミット	藤原岳史	藤原岳史	
10		○					○		KIBBUTZ	古民家再生	城下町のカフェ、宿等		吉成佳泰	
11				○			○		いなかの窓	ゲーム、eスポーツイベントの開催	フォートナイトイベント		本多紀元	comado
12					○				岡田工務店	大工職人のネットワーク	古民家改修	岡田常彦	岡田常彦	
13					○		○		丹文窯	陶工職人の育成	窯元での職人育成	大西雅文	大西雅文	丹文窯
14					○		○		末晴窯	陶工職人の育成	窯元での職人育成	西端正		末晴窯
15			○	○	○		○		NPO法人里山研究所	獣害対策を通じた関係人口づくり	農地での各種イベント実施	鈴木克哉	鈴木克哉	川阪オープン
16	○								一般社団法人BEET	市内高校生向けの「夢授業」実施	学校への出前授業		細見勇人	
17			○	○	○		○		一般社団法人丹波篠山キャ	農村の起業人材育成	イノベーターズスクール	中塚雅也	中塚雅也	イノベーションラ
18				○			○		岩茶房丹波ことり	中国茶を楽しむコミュニティ	岩茶ワークショップ等	柴田咲美	柴田咲美	岩茶房丹波ことり
19				○			○		クラフトビレッジ	手仕事のオープンファクトリーを定期開催す	丹波篠山クラフトビレッジ		中西一矢	
20							○		Satoyakuba	地域づくりのネットワーク形成	丹波立杭将来ビジョン策定のコーディネ		田林信哉	
21			○	○			○		アーキペラゴ	アーティストのネットワーク	域外アーティストの作品展示等		小菅庸喜	アーキペラゴ
22	○		○				○		Local PR Plan	まちづくり	Local PR Plan他	安達鷹矢		NIPPONIA他
23				○			○		クラフトビレッジ	職人	エアビー?		田川剛	DEN
24				○			○		ささやまサイクルイベン	自転車	ささやまサイクルイベント		村上氏	工房ハイランダー

居住地区まち

居住まちのみ保存地

②ネットワーク拠点リスト

・ネットワークの拠点として機能している場所や事業所をリスト化。(62 拠点)

具体的には、

- a) 滞在拠点・・・農家民宿、民泊、お試し移住体験住宅など
- b) 仕事拠点・・・シェアオフィス、コワーキングスペース、オープンカフェ、
- c) 活動拠点・・・レンタルスペース、交流スペース、お試し出店やイベントができるチャレンジスペースなど
- d) 店舗型拠点・・・人や地域情報が集まる拠点機能を持つカフェや蕎麦屋などの飲食店、雑貨屋や理容美容関係など
- e) 師弟型拠点・・・師匠(マスター)のもとで、起業に向けた弟子入りができる店舗趣味趣向型ネットワーク、師弟型ネットワークを中心に既存のネットワークの現状把握し、リスト化することで、ネットワークバンクの構築につなげる。

【丹波地域内のネットワークリスト例】

	拠点分類					拠点概要						
	滞在拠点	仕事拠点	活動拠点	店舗型拠点	師弟型	拠点名	運営形態	運営者	拠点概要	所在地	マスター	コネクター
1		○	○			関西大学佐治スタジオ		関西大学・NPO法人佐治倶楽部	関西大学のサテライト。大学生の滞在拠点かつ地域交流拠点	丹波市青垣町佐治		植地惇
2	○	○				竹岡邸	移住体験宿泊施設	NPO法人佐治倶楽部	移住希望者向けの暮らし体験宿泊施設	丹波市青垣町佐治		出町慎
3		○	○			衣川會館	レンタルスペース・コワーキング	NPO法人佐治倶楽部	佐治宿場町オフィス構想の中で、コワーキングスペースとして整備	丹波市青垣町佐治		出町慎
4		○		○		本町の家	文具店・交流拠点	NPO法人佐治倶楽部		丹波市青垣町佐治		秋津憲一
5		○	○	○		センバヤ	カフェ・交流拠点	一般社団法人カンデ		丹波市青垣町佐治		出町慎
6				○	○	手打ちそば木琴	蕎麦屋	佐藤勉	蕎麦屋。蕎麦打ちの弟子入り支援、移住や住まいの支援も	丹波市山南町松森	佐藤勉	佐藤勉
7	○	○	○			iso乃家	レンタルスペース・コワーキング	NPO法人情報社会生活研究所		丹波市氷上町石生		小橋昭彦
8				○	○	3 Roastery	コーヒーショップ・焙煎所	マイク	コーヒー豆の焙煎所兼コーヒースタンド。コーヒーの弟子入りも多数	丹波市青垣町小倉	マイク	マイク
10			○			柏原スタジオ			柏原町にある活動拠点	丹波市柏原		

③コネクター・マスター情報整理リスト（10人）

- ・ネットワークを作り出し、人と人を繋げる役割を担う「コネクター」、ネットワーク間を横断的に繋げる「コアコネクター」、師匠と弟子の新しい繋がりを作り出す「マスター」の存在が、ネットワークの形成にあたって極めて重要な存在となっている。

【コネクター・マスター情報整理リスト例】

名前	吉良 佳晃							
タイプ	コアコネクター	○	コネクター	○	マスター	○	その他	
組織名	丹波篠山 吉良農園			所在地	丹波篠山市不來坂52			
森の恵み	<input checked="" type="checkbox"/> 山林 <input type="checkbox"/> 建築 <input type="checkbox"/> 木工 <input type="checkbox"/> 伝統技術 <input checked="" type="checkbox"/> 農業 <input checked="" type="checkbox"/> 自然 <input checked="" type="checkbox"/> 環境 <input checked="" type="checkbox"/> 食 <input type="checkbox"/> 文化 <input checked="" type="checkbox"/> 人 <input type="checkbox"/> その他							
活動の概要	年間50品種ほどの野菜やハーブ等を栽培しながら、農地をその周囲の自然環境をも含めた学びの場、成長の機会提供の場ととらえ、参加型の酒米づくり、有機農業や山での仕事について学べるスクールを開講している。			活動の経緯	2014年 「吉良有機農園」にUターン就農 2020年 事業継承「丹波篠山 吉良農園」に変更 「丹波畦師」スタート 2021年 「ミチのムコウ」スタート 2023年 「Be Satoyama 2030」スタート			
拠点名	丹波篠山 吉良農園	所在地	丹波篠山市不來坂52					
拠点タイプ	<input type="checkbox"/> 滞在拠点 <input type="checkbox"/> 仕事拠点 <input checked="" type="checkbox"/> 活動拠点 <input type="checkbox"/> 店舗型拠点(業態：カフェなど) <input checked="" type="checkbox"/> 師弟型拠点							
建物タイプ	<input type="checkbox"/> 空き家改修 <input type="checkbox"/> 廃校活用 <input type="checkbox"/> 新築 <input checked="" type="checkbox"/> 機能付加 <input type="checkbox"/> オンライン <input type="checkbox"/> まち <input checked="" type="checkbox"/> その他							
立地タイプ	<input type="checkbox"/> 市街地 <input type="checkbox"/> 駅周辺(10分圏内) <input type="checkbox"/> 商業地 <input checked="" type="checkbox"/> 農山村集落 <input type="checkbox"/> 住宅地 <input type="checkbox"/> その他()							
拠点概要	1995年6月阪神淡路大震災を機に、父の正博氏が専業農家に転身し、市内に直売所「野菜の村」を始めたのが丹波篠山吉良農園のはじまり。学校給食のリサイクル堆肥や刈り草を利用した草マルチ、間伐した竹を杭にするなど、できるだけ土に還る資材の活用に取り組む地域資源循環型の農園。酒米づくりや里山農業について学べるスクールを開校するなど、農業分野の交流体験の拠点となっている。							
活動事例1	「ミチのムコウ」参加型で酒米を育てて、地域の酒蔵で日本酒をつくる会員制の「100人ではぐくむ名前はまだ無い日本酒」などを実施。			活動事例2	「Be Satoyama 2030」座学を通じて里山を知り、実践を通じて里山に入る。年間を通じて、有機農業や山での仕事について、新しいつながりを発見し、学べるスクール。			
関連ネットワーク	丹波篠山イノベーターズスクール、丹波篠山 里山アカデミー、一般社団法人AZE、丹波篠山オーガニックグループ「丹波篠山 自然派」、一般社団法人グッドラック・ジャパン							
公的支援								
拠点運営の課題・今後の展望	<input type="checkbox"/> 活動を続けるための利益・財源の確保 <input type="checkbox"/> メンバーの新陳代謝 （立上げメンバーに固定せず、変わらない安心感と絶えず挑戦する気持ちで） <input type="checkbox"/> 行政と連携しつつ、分野ごとの横断的なつながりを民間で創っていく。							

④「丹波の森の恵み」産業化事例リスト（27件）

・「丹波の森の恵み」産業化ネットワーク（横断的ネットワーク）を立ち上げるべく、丹波地域における森の恵みを活用した取り組み事例の収集を行う。丹波地域で活動する木工作家や陶芸作家、丹波布技術者、農家やニッチな農作物卸業者、山林資源を活用した事業者、農家レストラン、檜皮葺などの伝統技術者などを想定している。

【「丹波の森の恵み」産業化事例リスト例】

	大分類	中分類	森の恵み	事業所名	事業者名	事業概要	所在地	マスター	コネクター	拠点
1	農業	生産・販売		ことのはファーム	善積良至		丹波市春日町			
2	農業	生産・販売		くまゆき農園	足立浩一		丹波市青垣町			
3	農業	生産・販売		竹岡農園			丹波市山南町	竹岡氏	竹岡氏	
4	農業	生産・販売		ふえのみち農園	横山 湧亮		丹波市山南町	横山 湧亮		
5	農業	生産・販売		有無農園		無農薬小麦など	丹波市市島町			
6	伝統技術	檜皮葺	山・伝統	村上社寺工芸社	村上英明	檜皮葺職人	丹波市山南町	村上英明		
7	木工		山・木材	monoile			丹波篠山市			
8	農業	生産・卸し		パブリックキッチン	(株)パブリックキッチン	農家レストラン、東京の店舗への卸し	丹波市春日町		山口 圭司	
9	林業			フォレストドア	足立龍男	山の六次産業化	丹波市青垣町		足立龍男	フォレストドアしぐら
10	林業	林業	山・木材	mocca	株式会社デカシヨ林業	林業・加工・宿泊・カフェ・コワーキングスペース	丹波篠山市丹南町	辻徳人 辻聖子	辻徳人 辻聖子	mocca
11	農業	農業	里山	丹波篠山 吉良農園	丹波篠山 吉良農園	少量多品種栽培 会員制コミュニティ	丹波篠山市丹南町	吉良佳晃	吉良佳晃	
12	農業	生産・販売	里山	丹波篠山大内農場	丹波篠山大内農場	米。豆を中心に栽培・加工、観光農園、カフェ	丹波篠山市今田町本庄		大内正博	大内農場
13	農業	生産・販売・コンサル	里山	株式会社やがて	株式会社やがて・Earth Color Garden	環境創造農業（山林・竹林整備等）、有機農産物の製造・卸し・小売、養蜂、	丹波篠山市北新町		黒瀬啓介	株式会社やがて・Earth Color Garden
14	林業	木材加工	木材	居七十七	居七十七	漆器や家具などの木工品を制作	丹波篠山市丹南町		野澤裕樹	居七十七
15	製造業	陶磁器	土	丹文窯	丹文窯	丹波焼の製造販売	丹波篠山市今田町	大西雅文	大西雅文	丹文窯
16	製造業	陶磁器	土	伝市窯	伝市窯	丹波焼の製造販売	丹波篠山市今田町	市野達也	市野達也	伝市窯
17	製造業	陶磁器	土	末晴窯	末晴窯	丹波焼の製造販売	丹波篠山市今田町	西端正		末晴窯
18	農業	獣害対策	里山	さともん	NPO法人里山里山研究所	地域の獣害対策支援、関係人口づくり	丹波篠山市丹南町	鈴木克哉	鈴木克哉	川阪オープンフィールド

3) 情報ネットワークの構造化への提言

① 地区カルテを活用した情報整理

本調査において、丹波地域内のすべてのネットワークや拠点にかかる情報を収集出来ているわけではない。また、これらのネットワークや拠点は、今後時間の経過の中で、増減したりカタチを変えたり変化を重ねていくことが予想されることから、定期的に情報を収集し整理する仕組みが必要となる。

そこで、丹波地域内のまちづくり協議会や自治協議会を 1 単位として作成した「地区カルテ」を活用し、地区内の拠点情報やネットワーク情報をカルテの中に記載し、情報共有する仕組みを設けたい。

しかし、地区カルテは、2011 年の作成以降、更新されていないことから、定期的に更新を行う仕組みが必要となってくる。

② ネットワーク・拠点の情報共有プラットフォーム

丹波地域のネットワークや拠点の情報を収集するだけでは、ネットワーク間や拠点間の連携創出、地域や移住希望者、二地域居住者など様々な主体が活用することには繋がらない。丹波地域内で活動するネットワークや拠点に関する情報共有のためのプラットフォームが必要と考える。

従来から用いられてきた紙媒体を使った拠点 MAP の作成・配布は、インターネット環境が普及した現代社会において必ずしも有効な手段とは言えない。拠点やネットワーク情報を共有するターゲットの設定によっては、紙媒体よりオンラインでの情報共有の方が有効なケースが出てくることに留意したい。まずはこのターゲット設定を明確にし、ターゲットに合わせた情報共有ツールを洗濯していく必要がある。

例えば、オンラインを駆使するターゲット向けに、拠点やネットワーク情報を掲載したホームページの開設や丹波地域内の拠点情報やネットワーク情報を閲覧できるアプリの開発も効果的だと思える。

③ 丹波地域における拠点のあり方

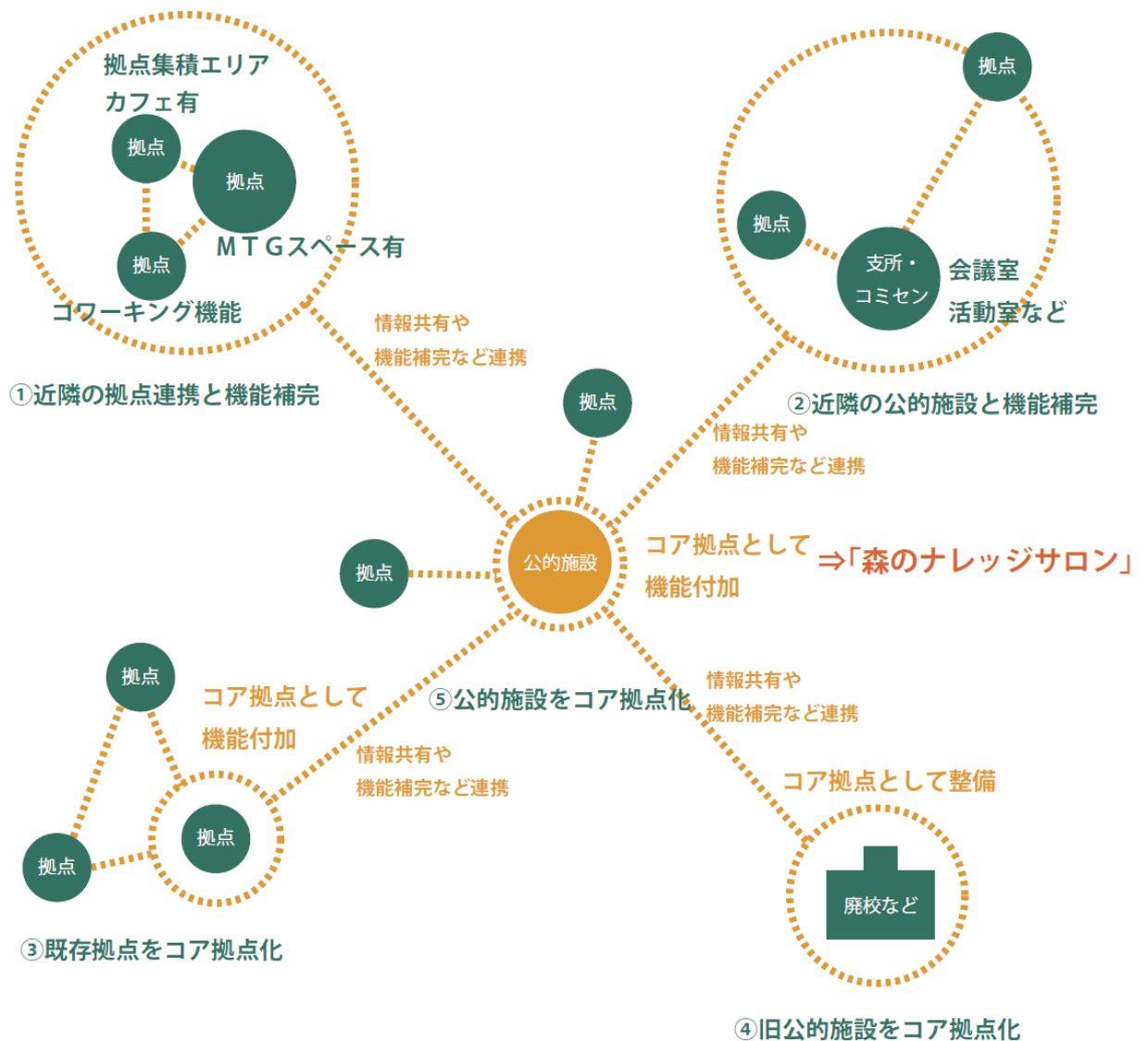
拠点を運営するコネクターやマスターへのヒアリングから、拠点のあり方についての今後の課題が明らかになってきた。単一の拠点では、対処できない機能を補完し合う体制が必要となってくる。機能を補完し合う体制として以下のケースが想定される。

- ・ 近隣の拠点と連携し、機能を補完し合う。ミーティングスペースなど、ある程度の広さ・設備のある拠点と小さなコワーキング拠点
- ・ 近隣に拠点がいない場合、公的施設(支所やコミュニティセンターなど)と連携し、機能を補完し合う
- ・ 既存の拠点に、公的資金で補完的機能を付加し、コアとなる拠点を整備し、近隣の

拠点と連携する

- 廃校利用や旧公的施設、公的資金を活用してコアとなる拠点を整備する
- 空白エリアや動線上の要衝にある公的施設に、拠点機能を付加し、コアとなる拠点を整備する

上記により、丹波地域内の拠点ネットワークを「森のナレッジサロンネットワーク」として連携するとともに丹波地域全体で俯瞰的に見たときに、「どこに」「どのような」機能が必要なのかを戦略的なビジョンが必要となる。「森のナレッジサロン連絡会議」で、拠点に関する戦略的ビジョンの検討・作成を行うことになる。



森のナレッジサロンネットワークのイメージ図

(3) 丹波の森づくり推進連絡調整会議

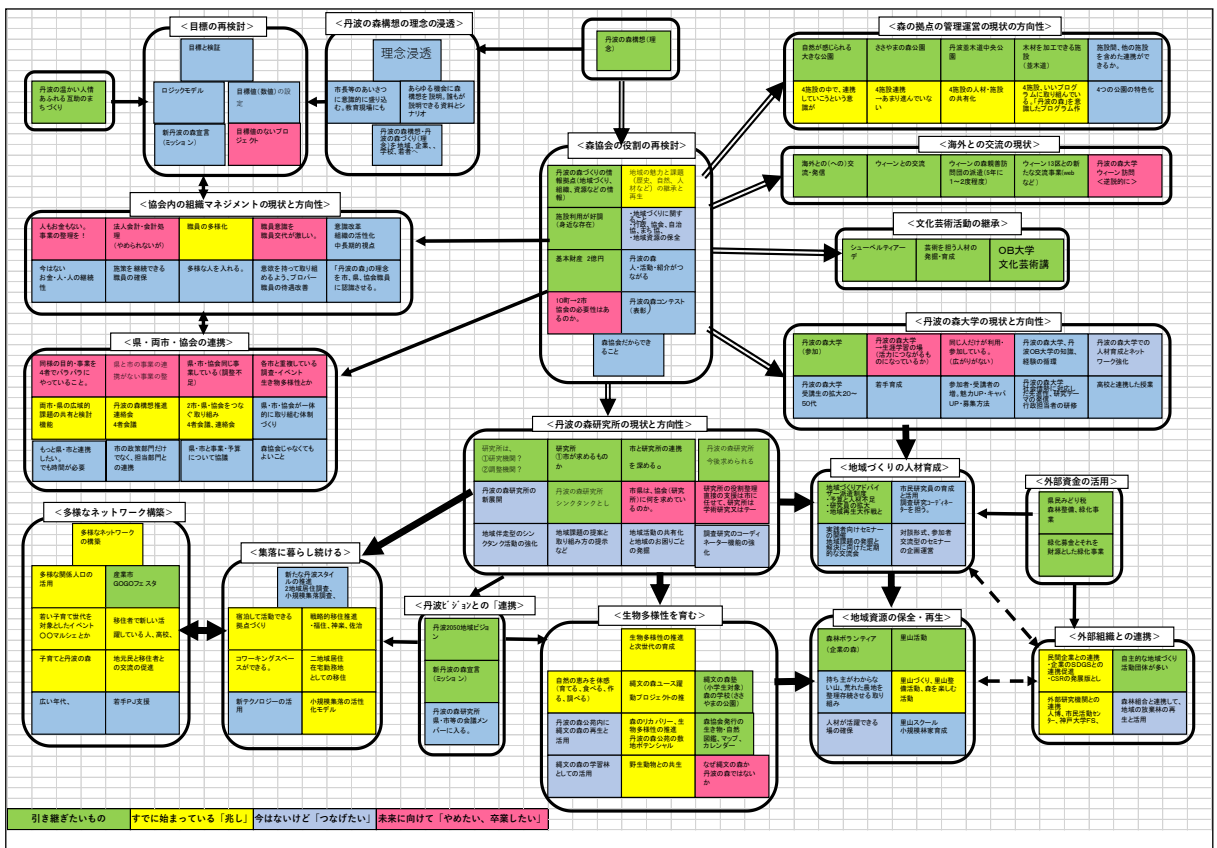
①地域再生プロジェクトチーム会議

- ・ 県民局の地域再生大作戦の事業解説とともに、丹波の森研究所の調査研究「集落の再生活活性化方策の検討」をテーマとして、丹波篠山市および丹波市の地域づくり担当者および丹波の森研究所の研究員による意見交換を行った。
- ・ 今年度はコロナ禍もあり、リモートでの開催となった。
開催日：令和4年11月17日

②丹波の森づくり小委員会

- ・ 丹波の森づくり小委員会では、「丹波の森づくり」に関する県民局、両市、兵庫丹波の森協会および丹波の森研究所の現況、今後の取り組むべき方向性について意見交換がなされた。今後概ね令和5年度前半で方向性をまとめ、意見を募ることとなった。
- ・ 開催日：令和4年11月30日、12月9日、令和5年3月15日
- ・ 丹波の森づくり小委員会では、まず丹波県民局、丹波篠山市、丹波市、丹波の森研究所の各担当者から、丹波の森宣言からこれまでの丹波の森づくり、県民局および両市の取り組みを振り返りながら、丹波の森づくりについての共通認識を整理した。

【丹波の森づくり小委員会ワークショップ意見集約】

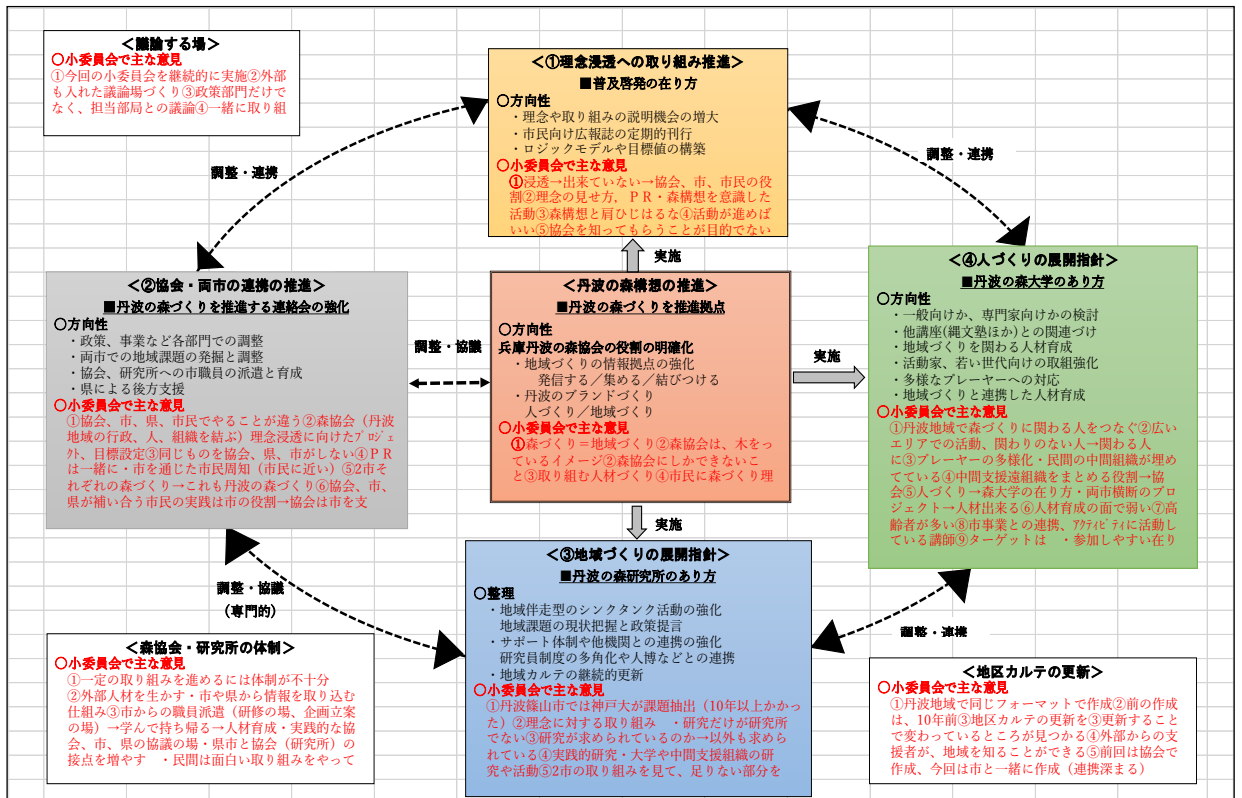


- ・ 2回の小委員会では、様々な意見が出され、意見が出されている段階で、今後意見の集約しながら、丹波の森協会、丹波の研究所も含め方法性を決めていくこととした。今後の計画としては、

①この小委員会を令和 5 年度以降も継続的に開催し、議論し、整理していく。(各委員から継続開催を求められた)

②議論を受けて、令和 5 年度に取り組めるものから取り組んでいく。丹波の森づくり小委員会では、まず丹波県民局、丹波篠山市、丹波市、丹波の森研究所の各担当者から、丹波の森宣言からこれまでの丹波の森づくり、県民局および両市の取り組みを振り返りながら、丹波の森づくりについての共通認識を整理した。

【小委員会でのワークショップ (WS 計 2 回) からみた今後の方向性】



1-2 フォーラム「持続可能なコミュニティ」の形成に向けて

1) フォーラム開催の趣旨

- ・人口減少・高齢化が進むなか、地域社会の維持・発展に向け、新しい仕組みの構築が求められています。従来の地縁的つながりを超え、移住者、二地域居住者、関係人口等が加わった域内外の新しいつながりのもとで地域を運営していく発想が重要になっています。
- ・一方、地域環境・社会・経済の統合的発展、すなわち SDGs（持続可能な開発目標）の実現という観点からも、地域社会の枠組みを刷新していく必要があります。
- ・そこで、本フォーラムでは、(公財)兵庫丹波の森協会が実施した研究の成果にもとづき、丹波地域における移住者・二地域居住者等を核とする新たなネットワークの実態を把握し、今後の地域運営のあり方を考えるとともに、環境・経済・社会の各側面から地域運営の新たな仕組みについての意見交換をします。

2) フォーラムの概要

①開催日時

- ・令和5（2023）年3月7日（火） 14：00～16：15

②開催場所

- ・丹波の森公苑 多目的ルーム

③定員

- ・180名（会場80名、オンライン100名）

④開催団体

- ・共催：兵庫県丹波県民局、公益財団法人 兵庫丹波の森協会
- ・後援：丹波篠山市、丹波市、関西学院大学建築学部

⑤概要

- ・あいさつ：公益財団法人兵庫丹波の森協会理事長 酒井 隆明
兵庫県丹波県民局長 今井良広

・成果発表

テーマ：丹波地域における移住及び二地域居住等の現状分析

総括：角野幸博（丹波の森研究所長、丹波の森公苑長、関西学院大学建築学部長）

発表者：出町 慎（丹波の森研究所登録研究員）

- ・丹波の地域づくりー今後の展望と県民局の取組ー

発表者：今井 良広（兵庫県丹波県民局長）

⑥パネルディスカッション

テーマ：「地域運営の仕組み革新を考える」～人・ネットワーク・ストック・技術を活かす～

- コーディネーター
杉山 武志（兵庫県立大学環境人間学部准教授）
- モデレーター
田川 剛（丹波篠山市大芋地区移住コーディネーター）
- パネラー
衛藤 彬史（兵庫県立人と自然の博物館研究員）
田林 信哉（Satoyakuba 代表）
出町 慎（特定非営利活動法人佐治倶楽部代表）
金崎 美和（K's GARDEN ~handmade studio Momo~）

【フォーラムのチラシ】



フォーラム
「持続可能なコミュニティ」の形成に向けて
～人・ネットワーク・ストック・技術を活かす～
2023年3月7日(火) 14:00～16:15

■開催趣旨
人口減少・高齢化が進むなか、地域社会の維持・発展に向け、新しい仕組みの構築が求められています。従来の地縁的つながりを超え、移住者、二地域居住者、関係人口等が加わった域内外の新しいつながりのもとで地域を運営していく発想が重要になっています。
一方、地域環境・社会・経済の統合的発展、すなわち SDGs（持続可能な開発目標）の実現という観点からも、地域社会の枠組みを刷新していく必要があります。
そこで、本フォーラムでは、(公財)兵庫丹波の森協会が実施した研究の成果にもとづき、丹波地域における移住者・二地域居住者等を核とする新たなネットワークの実態を把握し、今後の地域運営のあり方を考えるとともに、環境・経済・社会の各側面から地域運営の新たな仕組みを検討します。

■開催日時
2023年3月7日(火) 14:00～16:15

■開催場所
丹波の森公苑 多目的ルーム
(住所：丹波市柏原町柏原 5600)
(電話：0795-72-2127)

■定員
180名(会場80名、オンライン100名)

■開催団体
共催：兵庫県丹波県民局
公益財団法人 兵庫丹波の森協会
後援：丹波篠山市、丹波市
関西学院大学建築学部

■フォーラムの概要
○あいさつ【14:00】
(公財)兵庫丹波の森協会理事長 酒井 隆明
兵庫県丹波県民局長 今井良広
○成果発表【14:10】
テーマ：丹波地域における移住及び二地域居住等の現状分析
総括：角野 幸博（丹波の森研究所長、丹波の森公苑長、関西学院大学建築学部長）
発表者：出町 慎（丹波の森研究所登録研究員）
○丹波の地域づくり【14:50】
～今後の展望と県民局の取組～
発表者：今井 良広（兵庫県丹波県民局長）
○パネルディスカッション【15:15】
・テーマ「地域運営の仕組み革新を考える
～人・ネットワーク・ストック・技術を活かす～
・コーディネーター
杉山 武志（兵庫県立大学環境人間学部准教授）
・モデレーター
田川 剛（丹波篠山市大芋地区移住コーディネーター）
・パネラー
衛藤 彬史（兵庫県立人と自然の博物館研究員）
田林 信哉（Satoyakuba 代表）
出町 慎（特定非営利活動法人佐治倶楽部代表）
金崎 美和（K's GARDEN ~handmade studio Momo~）

■申し込み・問い合わせ
丹波県民局県民交流室たんば共創課
TEL. 0795-73-0690
公益財団法人兵庫丹波の森協会
TEL. 0795-73-0933

WEB申請はこちら↑

1-3 地域づくり支援事業

(1) 地域づくりアドバイザーの派遣

1) アドバイザー派遣重点地区の支援

- ・地域づくり重点地区への支援としてのアドバイザー派遣は、主に森研究所の研究員が地域づくり支援を行います。最近では、集落だけでなく、高校や小学校からも、現況把握や問題整理など、ワークショップによる課題解決のための支援要望があり、若い世代の地域づくりの関心を高める取り組みとしても考えています。

2) アドバイザー派遣実績

①丹波篠山市河原町地区「河原町通り無電柱化完成記念鉾復活実行委員会」におけるアドバイス業務（昨年度からの継続）

- ・道路上空に電線がなくなったことから 110 年ぶりに鉾を設置した鉾山巡行を実施する（令和 5 年春予定）ため実行委員会設置
- ・ポスター、チラシ作成のほか助成金申請、クラウドファンディング等について助言を行った。
- ・実施日：令和 4 年 5 月 14 日、6 月 18 日、7 月 30 日、9 月 17 日、11 月 4 日

②丹波市の三寶寺境内周辺の植栽管理計画（三寶寺檀家総代会）

- ・サクラの老木化による植栽更新および花の咲く散策路の整備についてのアドバイス
- ・整備計画を地域と協議するためのたたき台の作成
- ・実施日：令和 4 年 5 月 14 日、6 月 8 日

③丹波市「かいばら雛めぐり実行委員会」

- ・藩邸の展示許可が教育委員会から出る予定なので、藩邸の目玉、どう魅力づけを行うか助言を行った。
- ・JR の展示許可及び旅行情報サイトへの情報提供を行った。
- ・実施日：令和 4 年 12 月 17 日

④福住地区まちづくり協議会支援

- ・協議会が進める地域活性化プロジェクトに対して、以下のような助言を行った。
- ・丹波の森研究所で行った調査結果概要報告
- ・地域活動に対する参加状況と意識特性
- ・実施日：令和 4 年 5 月 12 日、7 月 14 日、9 月 8 日、11 月 10 日
令和 5 年 1 月 12 日、3 月 15 日

2 令和4年度委託業務

2-1 縄文の森ユース躍動プロジェクト

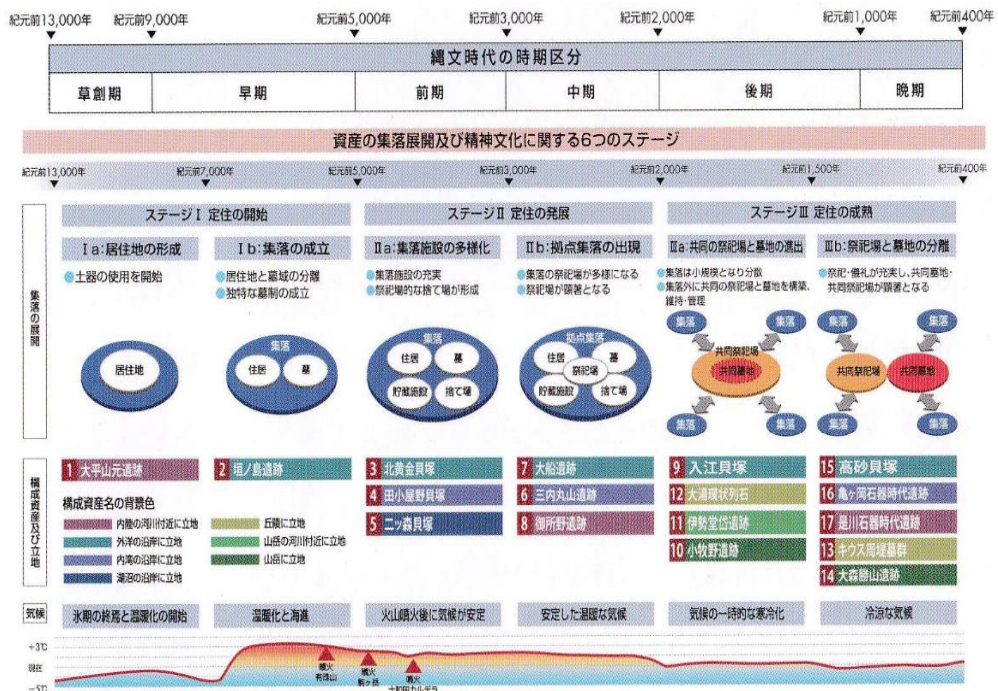
(1) 調査研究の背景

兵庫丹波の森協会では、「丹波の森づくり」の一環として当初より、初代の丹波の森公苑長である河合雅雄先生の理念のもとに「縄文の森塾」が小学生を対象として継続して開催されている。そして近年では、生物多様性の保全と農林業の活性化のために、丹波の森の再生（グリーンリカバリー）が大きな課題となっており、それに関わる人材育成も必要となってきている。

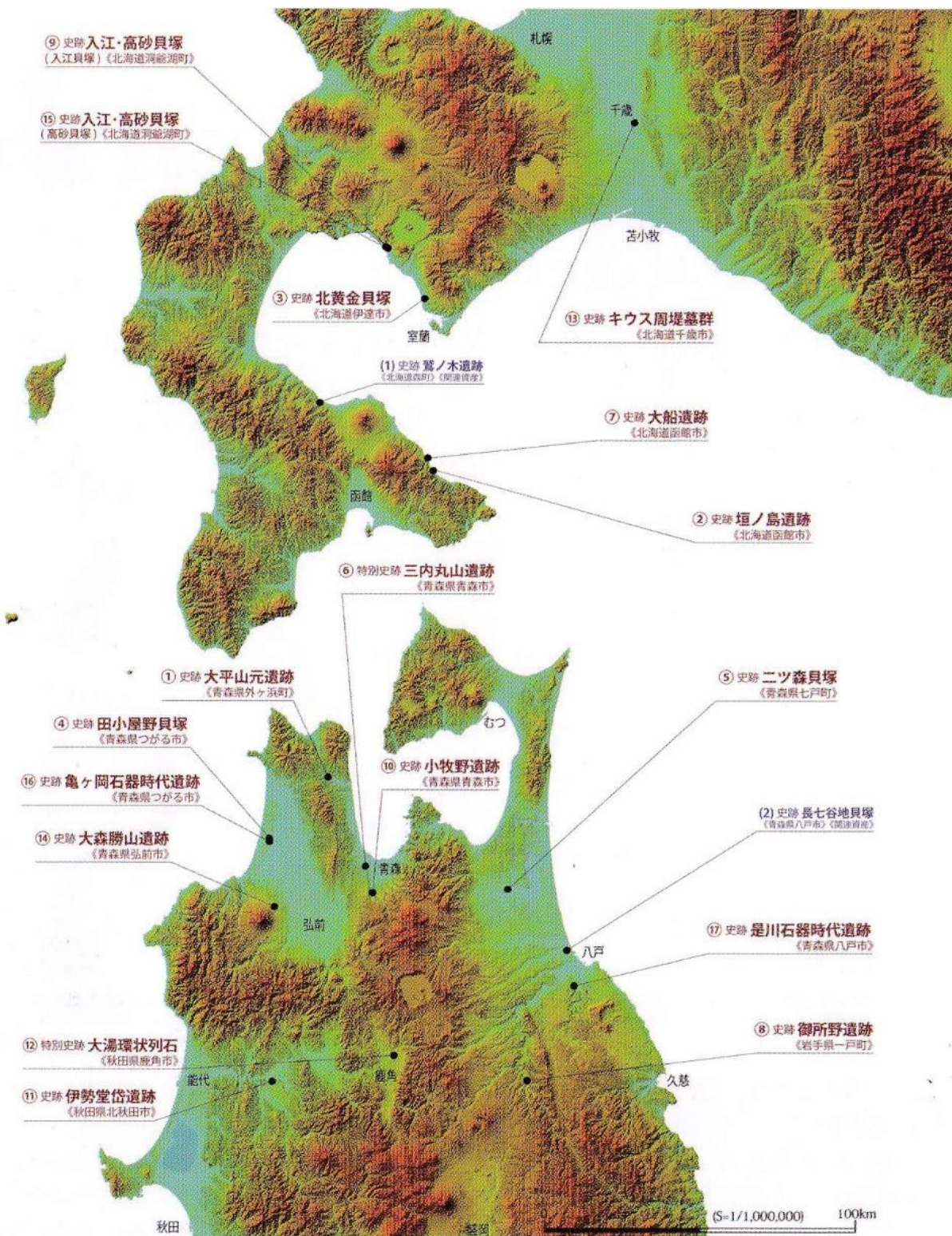
このプロジェクトでは、丹波地域における生物多様性の推進に向けて、丹波の森公苑において、縄文里山文化を体感できる縄文里山林の目標像（森林の再生ゾーニングや循環的な管理計画、活用方法など）の提案と実践を行うことを目的としている。具体的には、丹波の森の「植物」（森の再生と活用方法など）と「動物」（野生動物と人との共生方法など）を学ぶとともに、「縄文里山文化」への理解を深める。その結果を踏まえて、丹波の森公苑における縄文里山林の再生方法などを検討・提案し、さらに提案した目標像に即した段階的な整備を実践し、実践前後の植物相や動物行動調査なども継続的に実施しようとするものである。

(2) 北海道の縄文遺跡群における縄文の森の再生・活用実態の視察

「縄文の森ユース躍動プロジェクト」を推進していくために、縄文の森の具体的な計画・整備・管理と人材育成方法などのあり方を検討することが必要になってくる。その基礎資料を得るために、類似事例として、世界遺産に指定された北海道および北東北の縄文遺跡での縄文の森の再生・活用実態を視察することを目的としている。



今年度は、北海道の縄文遺跡群（入江貝塚遺跡、高砂貝塚遺跡、大船遺跡、垣の島遺跡、鷲ノ木遺跡、キウス周堤墓、北黄金遺跡）とそれらのガイダンス施設、ならびに国立施設ウポポイ（民族共生象徴空間）を対象として、それぞれの遺跡における縄文の森の再生・活用実態などについて調査した。（詳細は資料4①参照）



【考察：丹波の森公苑における縄文の森の整備・活用計画に向けて】

＜基本的な方向のあり方＞

- ・北海道と北東北が一体の縄文遺跡群として世界遺産に指定された背景として、気候風土が類似し、山の幸に恵まれている落葉広葉樹林帯に属していること、さらに太平洋側と日本海側の海流が会う豊かな漁場に近接しており、気候の安定期には大規模集落も成立したことを再認識した。
- ・したがって、兵庫において、縄文の森の文化を再生するためには、当該地の気候風土に基づき、照葉樹林帯（イチイガシ林など）を想定して計画する必要がある。
- ・また、兵庫県内陸部の丹波地域の立地特性にも対応して、海よりも山と川の資源を主にした、縄文フェノロジーカレンダーの作成も必要である。それに基づいた縄文里山文化の創造が重要である。

＜具体的な整備と活用のあり方＞

- ・今回の視察地では、縄文の森そのものの整備は限定的であり、その活用も散策や森の案内程度に留まっており、森を活用した体験や学びは今後の課題としているところがほとんどであった。昨年度視察し、今年の丹波の森大学で紹介して頂いた「御所野遺跡」は、縄文の森を復元し、その森を活用したプログラムづくりが進められており、参考にしていきたい事例である。
- ・関わり方のステージとして、「知る」⇒「体験する」⇒「学ぶ」⇒「参加する」などがあり、初心者からリピーターまで幅広いメニューの開発が必要であると感じた。今回の視察先においては、体験型のメニューが多く確認でき、当該地との関わりを継続していくためには、効果的なメニューであると考えられる。
- ・整備内容と活用方法が、うまくリンクしていない印象を受けた。特に、利用者層の想定や利用者単位（個人、団体など）なども想定して検討する必要があると思われる。さらに、団体での利用は効果的と思われ、小学校・中学校・高校などのカリキュラムとの関係性などにも配慮する必要があると思われる。
- ・また、整備内容と活用内容を検討する過程において、予めボランティア組織を立ち上げ、将来の整備・管理・活用に関わって頂くことになると思われる方々との協働作業は重要であると感じた。

(3) 縄文の森ユース躍動プロジェクト（動物編）

①概要

野生動物は自然生態系の重要な構成員であり、私たちの生活にさまざまな恵みを与えてくれる存在である。ところが近年、野生動物が人間の生活や生産活動に与える負の影響が大きな注目を集めている。たとえば、シカ、イノシシ、サル、クマなどの中・大型哺乳類による令和元年度の農作物被害金額は全国で年間 158 億円となっている。

自然豊かな丹波地域であるが、獣害がある以上、地域住民は野生動物の存在に対して否定的な価値観を抱きやすく、こうした価値観が若者世代にも受け継がれていく可能性がある。

生物多様性を推進していくためには、「望ましくない」自然とどのように付き合っていくかを考えていくことも重要である。それには、野生動物に対する適切な知識を学び、さらに実際のフィールドの中で様々な実践を伴いながら能動的に学ぶ場所づくりが必要となる。こうした状況を踏まえて野生動物と共生可能な地域づくりのための人材育成として、若年層を対象に、野生動物の本来の生態や行動、生態系の構成員としての役割等に理解を深めるとともに、人と野生動物の歴史や現代的課題を知り、人と野生動物の共生の未来に向けて考える集中講座「丹波の森ワイルドライフ講座」を 8 月 2 日から 8 月 5 日の 3 泊 4 日で開催した。

②スケジュール

8月2日（火）	8月3日（水）
13:00 ガイダンス・個人目標の設定 14:30 獣害対策現場訪問 ・ICT 捕獲檻の見学 ・地元農家さんへのインタビュー 18:30 夕食 20:00 翌日の確認	9:00 前日の結果まとめ（振り返り） 12:00 昼食 13:00 ニホンジカの生態・行動について （大西先生の講義） 15:30 シカ・イノシシの痕跡調査 センサーカメラの設置 19:30 ライトセンサス調査へ出発 21:00 就寝
8月4日（木）	8月5日（金）
8:00 朝食（センサーカメラの回収） 9:00 前日の結果まとめ 12:00 昼食 15:00 ニホンザルの生態・行動について （中川先生の講義） 18:30 食事 19:30 ニホンザルの性別・年齢判別 21:00 就寝	7:00 出発 8:00 ニホンザルの行動観察 11:00 ニホンザルの講義と調査の振り返り 12:00 昼食 13:00 全体のまとめ発表 14:00 目標に対する振り返り・感想共有 15:00 終了・解散

（内容詳細については資料 4②参照）

③成果

本講座は、丹波地域における自然資源の一つである野生動物の存在が地域から害として捉えられている現状を若年層に受け継がせないことを目的として開催した。野生動物の生態や行動について学ぶ機会をつくりながら、地域における人と野生動物の軋轢や獣害問題などの社会的問題にも焦点を当てて講座を展開した。

講座終了後に参加者に対してアンケートを実施し、そこから得られた参加者の変化と影響について以下にまとめた。

【獣害対策現場を通じた野生動物に対する印象変化】

はじめに、アンケートの質問（1）「講座で得た気づきなど」からは、
「猿害の対策現場を実際に見ることで、生の声や肌感を学ぶことができた。」
「今までにシカやサルの被害が深刻だということは知っていましたが、それは実際どのような被害状況でどのような対策をやっていっているのかは全然知らなかった」
「獣害をただ悪いものと認識して対策するのではなく、野生動物と共生するため方法として、また、野生動物・獣害対策を地域の資源にするという考え方を持つことができました。」

- 参加者は丹波地域だけでなく東京など様々な地域から参加しており、野生動物が起こす獣害という問題について直面する機会は少なく、野生動物が農作物に被害を与えており地域にとっては悪の存在であるというイメージが先行していたと考えられる。
- 講座では人と野生動物の共生を考える上での課題として獣害問題を捉え、実際に獣害被害の多い地域でのインタビューや地域が取り組む獣害対策の現状について学ぶ機会を設けた。その結果として質問（3）の「印象に残ったプログラム」では以下のような回答が得られた。

「初日の獣害対策現場訪問が印象に残りました。獣害の対策方法を学んだだけでなく、様々な工夫や地域での連携、そして実際に対策を行う過程で出てきた問題点など、農家の生の声を聞ける貴重な経験でした。被害の大小で、「サル」と「おサルさん」というように、動物への認識が人によって異なるところも、獣害対策現場訪問が印象に残った大きな要因です。」

- 獣害対策現場の訪問では、参加者が地域内においても野生動物への認識に差があることを感じていた。また、現場での生の声を聞く経験は参加者にとっても印象に残る体験であり、野生動物に対する認識や今後の考え方の変化に影響を及ぼしている。

【講座を通しての意識変化、今後について】

「人と野生動物の軋轢を解消し、共生する地域づくりに貢献していきます。」
「野生動物に対する見る目が変わった」
「受講するきっかけは、獣害対策や調査の手法を学びたいということでしたが、主催の皆様と講師のお二人の野生動物への思いを聞いて、野生動物そのものについてもさら

に知識を深めたいと思いました。』

【野生動物に対する理解と共生の考えについて】

本講座が目指す野生動物の生態について興味・関心を持ち、人と野生動物の共生の未来について若年層が考える機会の提供としては、まずは専門家の先生方からシカ・ニホンザルの生態について普段は知ることのない深い内容までお話していただくことができた。さらに現場では野生動物の行動調査などを通してフィールドに出なければ得ることの出来ない体験となった。アンケートの「今回の講座を受講して、野生動物に対する興味や関心は増しましたか？」の項目でも参加者全員が「そう思う」「とてもそう思う」と回答しており、「実際にフィールドに出ることで、五感で体験することの重要性を認識しました。」といった意見も得られた。

最終日のまとめでは、「知る」「考える」「感じる」「行動する」といったサイクルで捉えることが人と野生動物の共生を考える上で必要なことであると話すグループもいた。このように今回の講座では座学や現場での体験など学習のあとには感じたことや学んだことをグループ毎に共有する時間を設けていたことが参加者の意識変化に影響を与えていと推察できる。

【参加者同士の交流による学びと今後について】

今回の講座では、質問（4）でも得られたように改善点や今後の開催に向けて期待するプログラムへの意見も出ていた。4日間という限られた時間の中でも、1日ごとの学びや体験を振り返りながら参加者自身が意欲的に学ぼうとしている姿勢が見られた。また、自身と近い年齢層でありながら様々な背景を持つ人達と時間をともにする機会は参加者にとっても自分の見えていない視点を教えてくれる存在となっていたのではないかと推察できる。講座を通して参加者達は野生動物に対する認識やこれからの野生動物との関わり方については、「自分自身が野生動物について学び続けるとともに、より多くの人に、興味関心を持ってもらえるような取組を行いたい。」

「「害」という一方的な捉え方、短期的な対策ではなく、いかに共生していくか、長期的な視点で考えるようにしたい。」

などの回答も見られた。

「今回の講座を受講して、人と野生動物が共生する地域づくりに対する興味・関心は増しましたか？」の項目では参加者全員が「とてもそう思う」と回答しており、人と野生動物の共生について考えることは容易ではないが、本講座が若い世代の参加者がこれからを考える一つのきっかけになったと評価できる。

(3) 縄文の森ユース躍動プロジェクト（植物編）

①概要

令和4年度 3 回に渡って、氷上高校の生徒を対象に、里山に直接触れる機会をつくり、高校生自ら身近な里山の現在とこれからの関わり方を考えるきっかけづくりを行った。

	テーマ	会場	日時
第 1 回	里山とは？丹波の森公苑の里山を歩く	丹波の森公苑	8月30日（火）
第 2 回	高校裏の「里山」を読み取る	氷上高校、黒井城跡	10月14日（金）
第 3 回	高校裏の「里山」をデザインしてみる	氷上高校農場周辺	1月30日（月）

第 1 回は、丹波の森公苑を会場に、そもそも里山とは何か、特に稲作農業と関わりの深い丹波の里山のかつての姿について、理解を深めた。氷上高校は大きな面積の農場や畜舎を持ち、農業を学ぶコースのある学校として長年続いてきた背景があり、生徒たちも農業への理解がある高校生である。一方で、現在の授業で里山と関わる機会はほとんどなく、農場に隣接する里山に入った経験もない、とのことであった。そこで、里山が近隣の人間活動に伴って成立するプロセスと、生態学的ななりたちの両面から話題提供し、理解を深めた。

第 2 回は、氷上高校の農場を起点に、植生を観察しながら黒井城跡に登り、多様な植物の分布と植生変化を体感した。かつて氷上高校では、裏山から黒井城跡へ上る登山道が整備されていたとのこと、今回、高校の農場の東北端付近からルートを探った。その結果、一部で低木が道上に繁るところがあったものの、登山道自体は崩れなどもほとんどなく、登頂できることがわかった。高校から兵主峠を通り、西の丸跡を通過して、黒井城本丸跡へと続く道である。道々、先生と生徒の語らう中で、このルートの再整備、特に高校から兵主峠までの間の管理は、氷上高校生が高校裏の里山に親しむ上で鍵になりそうだ、との話が出ていた。

また、このルートを歩く中で、高校敷地外側の防獣柵を境に、シカの食害によって植生が大きく変わることを体感した。

第 3 回は、教室でまず丹波地域の里山について振り返ったのち、農場周辺の里山を歩いた。農場の北東端付近の敷地外に、ため池跡があるが、こちらは、獣害予防の観点から高校職員が時々刈り払いや伐採を行っているとのことであった。池畔にはコナラなどの雑木と植林地があり、元池底や堰堤にはニワウルシなどシカの不嗜好植物だけが繁茂していた。地形的に高低がありつつ歩きやすいため、高校生が里山に親しむ空間としてポテンシャルがありそう、という意見が出た場所であった。

一方、ササ藪化していた果樹園に果樹を再植栽している区域（下図）は、すぐ横に小さな沢の流れもあり、キイチゴ類など植物の多様さも少し見られた。こちらは防獣柵の内側

であり、獣害が少ないことから、果樹園として再生しつつ山菜や山野草の復活も期待できそうな場所である。獣害予防の視点から、敷地内はササ藪の繁茂を防ぐことが望まれるため、果樹園として定期的に草刈りを加えることが、ササの抑制と山野草の生育条件改善を両立させる対策になりそうである。

第3回は「高校裏の里山をデザインしてみる」というテーマを掲げたが、農場周辺を歩いた結果、参加した高校生からは、植生の他に、地形的な面白さや、動物の活動がとても活発であることに興味を湧いたようであった。里山をどうデザインするか、という問いに対して、山菜やバーベキューなど食に繋がる要素も検討しつつ、最終的に「アスレチック的な要素のある場を創れば、高校生がもっと里山に入る、高校生が遊べる里山にしたい」などという意見にまとまった。体を動かして楽しむ場としての里山像は、スポーツが盛んな氷上高校らしい里山像といえるかも知れない。(詳細は資料4③参照)

②課題分析

氷上高校は授業で農業を学べる高校であり、農業クラブ活動もあるが、里山を授業で扱うことがほとんどなかったとのことで、生徒たちの経験も小中学校での環境学習以外にあまりないとのことであった。この点で、高校生向けの里山体験プログラムの重要性を再認識できた。

一部の生徒は、祖父母が山菜やキノコを採ったり、ハイキングで山を歩く、という経験をしており、そうした機会はとても印象に残っているとのことで、丹波ならではの身近な里山体験機会を増やすことは、若者の視野と楽しみを広げる現代的価値を十分持っていると思われる。

一方で、氷上高校周辺の里山自体の課題も明らかになった。氷上高校の敷地は高さ約2mの防獣柵(金網)で囲われており、シカやイノシシの侵入をかなり抑制している。その結果、敷地内では山菜や薬草となる山野草の種類が比較的多く、敷地外(防獣柵の外)では下層植生が極端に貧弱でシカ不嗜好植物に偏っている。その結果、敷地外では、里山の草本植生および次世代の幼樹がほとんど育っておらず、里山の生態系としてかなりバランスを欠き、不健康な状態と言える。

また、学校職員は農場への獣害を防ぐため防獣柵の点検と補修にかなり手を割かざるを得ず、防獣柵の外の植生管理にはなかなか手が回らない、という感想を持っている。他方、防獣柵の外側には、学校敷地と地元地権者の里山が連続した雑木林および針葉樹植林地が広がっているが、地元住民もほとんど森林に入っていない様子であり、鬱蒼とした間伐遅れの林などが目立っている。

それらを総合すると、氷上高校周辺の里山は、高校生、学校職員、地元住民のいずれもあまり立ち入らない放置状態の森林となっており、生物多様性もかなり低下傾向にあるといえる。

③まとめ（令和5年度に向けて）

今年度の3回のプログラムを通じて、里山についての氷上高校生の学びの現状、高校隣接地の里山の現状、高校周辺における地元住民の里山への関わりの少なさなどを確認できた。

里山の学びについては、丹波地域の農業全体として里山との関わりがほとんど失われていることから、授業カリキュラムで扱うことが難しかったことはやむを得ないものと思われる。他方で、獣害対策や災害の予防・緩和などの観点から、高校生が身近な里山について正しい知識を体験的に学び、自分事として里山づくりに参加することは、潜在的に重要なニーズとなっている。

そうした中、一部の小学校などで行われている環境学習としての里山活動は、高校生にとって貴重な原体験となっていることも今回話題に上った。また、機会さえあれば、学校に隣接する里山をフィールドとして、高校生が自発的に楽しめる可能性も十分に感じることができた。

今年度の活動を受け、担当の山内教諭から、来年度は授業の中で10名程度のグループ活動として里山に取り組みたいとの意向があった。今年度の活動を下地として、一年を通じた授業として取り組み、そのうち年3~4回程度、外部講師を招いて氷上高校周辺か丹波の森公苑の里山に入る機会を織り交ぜていきたい、とのことである。氷上高校として、単年度の取り組みというよりも複数年に渡って持続的に里山に関わる仕組みをつくらせたい、とのことなので、ぜひ継続的にサポートしていきたい活動である。

2-2 丹波地域のモデルとなる里山づくり活動団体支援業務

(1) 業務の目的および内容

①業務の目的

丹波地域の美しい里山を次の世代へと繋いでいくため、里山づくり活動団体が森林整備にかかる問題点や課題を整理し、里山づくり計画を策定し、地域に根ざした息の長い取り組みとなるよう支援体制を構築するための基礎資料を作成することを目的とする。

②業務内容

1) 里山づくり協議会の設置

- ・選定された下表の里山づくり活動団体（以下、活動団体）については、里山づくりアドバイザー（以下、アドバイザー）の支援を受けながら持続的に活動が可能な体制になるよう各活動団体が運営する「里山づくり協議会（以下、協議会）」を設置する。
- ・協議会を構成するメンバーは活動団体、アドバイザーのほか、（公財）兵庫丹波の森協会丹波の森研究所、活動地所在市（丹波篠山市、丹波市）の担当課、丹波農林振興事務所 等とし、（公財）兵庫丹波の森協会（丹波の森研究所）はコーディネーターとして活動団体への助言、支援を行う。

- ・里山づくりアドバイザーを派遣している活動団体（10 団体）

団体名（応募順）		活動区域
平成 31 年度 採択	生郷里山づくり懇話会	丹波市氷上町
	平松区森林愛好会	丹波市春日町
	（辞退）北岡本自治会（*令和 3 年度で終了）	丹波市市島町
	NPO バイオマス丹波篠山（森の学び舎）	丹波篠山市
	NPO バイオマスフォーラムたんば（里山ごんげん）	丹波市氷上町
	下三井庄地区	丹波市春日町
令和元年度 採択	上板井自治会	丹波篠山市上板井
	八幡共有山組合	丹波篠山市杉
	岩崎自治会	丹波篠山市岩崎
	ふるさと和田里山づくり協会	丹波市山南町
令和 4 年度 採択	（新規）国領地区自治協議会	丹波市春日町国領

(2) 業務の目的および内容

- ・採択時のヒアリング内容を中心に里山づくり活動団体の概要を取りまとめた。

活動団体	ヒアリング内容	考慮点
生郷里山づくり懇話会	<ul style="list-style-type: none"> ・活動対象エリアは、水分れ資料館周辺と小学校・幼稚園の裏山の2地区 ・ヒカゲツツジなどの希少種の群生地があり、シーズンには愛好家が相当数訪れるが、遊歩道整備は十分とは言えない状況 ・実績としては自治会の草刈り程度であり、活動組織づくりが今後の課題となっているようである 	<p>これから森林整備に取り組もうとする段階であり、様々な面でのアドバイスが必要。 ヒカゲツツジなど植生保全。</p>
平松区森林愛好会	<ul style="list-style-type: none"> ・林野庁の森林・山村多面的機能発揮対策交付金を受けている。交付金で機材等を備え、多面的な活動に取り組んでいる。要請を受け近隣集落へも応援に行っている。 ・月に4~5回の活動を行っている（非常に高い頻度） ・森林整備だけでなく、子ども達の森あそびや薪づくりなど多様な活動を継続して実施している。 ・薪やチップの販売も手掛けている。特に竹パウダーを土壌改良剤や肥料としての活用を試みている。 	<p>他地区の事例や森あそびへの助言多様な森林整備を確認し、今後の方向性を整理 森あそびや資源の活用 竹パウダーを活用した商品開発（有機農法等での活用）</p>
バイオマス丹波篠山	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO 法人バイオマス丹波篠山が主体となって「森の学び舎プロジェクト」という里山利用（レクリエーションや体験活動）を図ろうとしている。 ・篠山市の公有地である ・「大路こどもの森」や「ささやまの森」のような活動拠点づくりを想定。 	<p>通常の里山整備とは若干異なるが、西紀運動公園との連携も可能であり、レクリエーション主体の森づくりも意味がある。</p>
バイオマスフォーラム丹波	<ul style="list-style-type: none"> ・子育て世代を応援する森あそび場を目指しており、現在の活動もそこに重点が置かれている。 ・NPO のメンバーが主体となっており、地域との連携は希薄である。 ・森林を場として、子どもを中心とした体験や環境学習を進めている。 	<p>環境学習や森のクラフト等のアドバイザーが適切。</p>
下三井庄地区	<ul style="list-style-type: none"> ・自治会の林野委員会が主体となって活動。 ・住民参加型森林整備事業や森林・山村多面的機能発揮対策交付金などの補助制度を活用している。 ・道路沿いの森林が整備対象となっており、いわゆる里山林縁部だけであり違和感がある。 ・地域内には「大路こどもの森」があり、そこで活動している森林インストラクターも本会に活動参加している。 	<p>活動地について詳しく聞く必要があるが、活動については積極的である。 （活動団体内に森林インストラクターの山崎氏が参画している）</p>

<p>ふるさと 和田 里山づくり 協会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・岩尾城跡（石垣、堀、井戸など）、校山園（学校林）、小新屋観音、石金山（登山、瀬戸内海を眺望） ・森林の手入れ不足 ・登山道や公園の清掃等の維持管理に取り組む。 <p>【目指す里山づくり】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①歴史愛好家や登山愛好家が訪れる観光拠点 ②遊べる森林環境 ③登山道の維持管理 <ul style="list-style-type: none"> ・組織（新規に和田里山づくり協会を立ち上げ、財産区の振興会と自治会長等で構成） ・活動継続のための取組 	<p>多くの関係者の意向を取りまとめる能力が必要 協会設立後、主要メンバーからヒアリング実施し、支援していく。</p>
<p>上板井自治会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自治会有林で11月～3月活動 ・里山彩園事業：シイタケづくり、薪など <p>【目指す里山づくり】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①木の駅プロジェクト活用：搬出方法、機材等が課題 ②危険木の伐採・除去 ③里山づくりを通したまちづくり、世代間交流、女性参画の推進 <ul style="list-style-type: none"> ・木の駅プロジェクト活用の実効性を高める ・女性の参加促進や楽しんで参加できる仕組みづくりなど 	<p>今後の活動内容の明確化とともに里山活動を通したまちづくりや女性参画の仕組みづくり支援が必要。</p>
<p>八幡共有山組合</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・登山、ハイキング客が多い ・手入れ不足による森林の防災機能の低下が危惧される ・補助事業（住民参画型森林整備）：作業道整備、間伐等 <p>【目指す里山づくり】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①安全で楽しめる森林環境の維持管理（林業作業道の補修管理） ②登山などの環境整備：休憩スポット等の整備など <ul style="list-style-type: none"> ・森林学習会などの開催・組合員（権利者）による活動組織の立上げ ・安全な散策道（作業道）の維持管理 ・地域住民等への開放：ハイキングや学習会の開催など 	<p>活動内容の明確化（年間活動計画の作成）の支援や安全対策の支援が必要。また、楽しい森づくりのノウハウを紹介など。</p>
<p>岩崎自治会</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・手つかず状態、人工林が多い（40～50年生）その他は広葉落葉樹林 ・マツタケ山（少ないがある） ・自治会として若い世代も巻き込んで活動したい。 <p>【目指す里山づくり】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①隣接する集落と連携した森林経営計画の推進（宇土～岩崎～谷山） ②四季を感じる里山づくり 	<p>将来に向けて隣接集落の連続する人工林を対象として森林経営計画の支援が望まれる。そのための支援も必要。 まずは、活動組織づくりや地域での活動内容の明確化を支援。</p>

	<p>③自治会及び新居住者とともに活動組織を立ち上げ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・組活動組織の立ち上げ ・広く参加者を引き入れ、活動を継続するための仕掛けづくり ・砂防ダム整備に合わせた周辺環境整備の推進 	
国領地区自治協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・峠道沿いの里山景観形成や貴重種保全など生物多様性の高い里山整備方法 ※ナガレホトケドジョウの生息地があり ・峠道の地区住民による継続的な活用・維持管理手法。 ・峠道周辺の里山の整備計画の策定・支援 ・丹波篠山市大山地区との交流や連携について ※峠道は丹波篠山市大山地区へ接続されている。 ・継続的活動を行う仕組みづくり支援（地域内外との連携、経済性等） 	<p>活動組織は国領自治協議会で、活動主体は国領自治会（代表井上祥太郎 220戸）実活動人員：30名程度令和4年度から4年間かけ丹波市の「地域課題解決事業」を活用し、日本ボランティア協会に整備委託する予定</p>

(3) 里山づくりアドバイザー報告

・今年度より里山アドバイザーからの報告は、日報形式となった。（詳細は資料5参照）

【例】里山づくり活動団体支援日報

	令和4年10月15日（土）	天候（晴）	記録者	門上 保雄	
	集合時刻	8:00	開始時間（作業等）	9:00	終了時間（解散） 12:00
支援団体名	ふるさと和田里山づくり協会				
出席者	活動団体	ふるさと和田里山づくり協会			合計14名
	アドバイザー	門上 保雄			
	外部人材	山本 竜矢（（株）山本木材）			
	その他	和田小学校（校長、教頭）			
支援内容 活動内容	活動場所	岩尾城跡登山道整備区域（校山園東側人工林内）			
	カテゴリー	協議・打合せ	通常活動	技術指導	研修・講習
		調査			その他（ ）
		<ul style="list-style-type: none"> ・安全な伐採について、改めて注意事項の確認、技術指導を行った。（活動を続ける中で、慣れからくる不注意、事故の危険性があることから、定期的な安全講習を提案） ・防護服、ヘルメット、チェーンソー、チルホール、ワイヤー等伐採時の道具の使用確認 ・個々人の伐採作業について、技術指導、注意事項の指摘を行った。 			
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・チェーンソーは動力で動いているので、使い方が我流になっていると危険な使用となる ・伐採に関してはベテランの人もいるが、防護服を含めて安全作業についての意識を常に高める必要がある。 				
今後の対応	<ul style="list-style-type: none"> ・1年に一度は、安全講習を行い、道具の点検・使用、技術的向上を図るよう提案 ・作業前に、参加者全員に当日の作業の内容・手順、安全確認等を徹底する 				
その他					

添付資料：活動場所位置図（計画図等に記入）、活動中の写真（写真帳） ※実績報告時は画像ファイルも添付

【資料編（別添）】

資料 1：丹波地域における移住および二地域居住等現状分析報告書（令和 4 年 10 月）

資料 2：丹波の森づくりにおける情報ネットワークの構造化業務報告書（令和 5 年 3 月）

資料 3：地域づくりアドバイザー派遣報告書

資料 4：縄文の森ユース躍動プロジェクト報告書

資料 5：丹波地域のモデルとなる里山づくり活動団体支援業務報告書